

が前條と共に朝鮮史の研究の不足に歸すべき誤謬である。新羅征伐については日本書紀ばかりに頼らずに、朝鮮側の史料によつて半島の形勢を窺はれば實際に離れねばならぬことになる。第八三頁の片岡山の御歌、第一三四頁の巨勢三杖大夫の歌には些細ではあるが誤がある、書紀及び法王帝説の本文の精閲を望まざるを得ぬ。第一三三頁の「發病から二十二日の二月二十一日が來た」とあるが、正月二十二日から數へて二月二十一日が二十二日目に非ざることば瞭々の事實に屬する。その他二二八頁の太子の王子女部合十四人とすることや（正しくは十三人でなければならぬ）、遣隋使に隨行したものを留學生八人とすること（正しくは留學僧四人留學生四人）など、史實に對する用意が可なり粗雑であるやうに思はれる。憲法十七條に比べて上宮御製疏に關する説明の餘りに簡潔に過ぎるのも聊か物足らない又法王帝説の書名を用ひずに、何時も「一僧侶の手記」とするが帝説がはたして確實に僧侶の手になつたものかどうか決定し難い實際に照して、如何に固有名詞を儉約するためとはいへ、穩當を缺くといはればならぬ。それとも著者が新發見の根據に基かれてゐるのであらうか。もしさうであれば速かに妄評を撤回して示教を仰ぎたい。以上著者の端書の堂々たるに脅かされて不敏繙讀の際納得し難い點一二を提出した迄である。讀者諸君の要望するところが聖德太子の人格と業績とに對するより以上の細微な考案と廣汎な知見とにあるならば、どうか著者が目下執筆中である『飛鳥文化の建設者と其時代』と題する書物の出版まで待つて頂きたい。その書物に於て著者は此小冊子が讀者諸

君に與へるであらう不滿の大部分を充分に補填し得るに相違ないを信じてゐる」と見えてゐるから、讀者の一人として不滿をいへば以上述べたやうな點の大部分が十分に補はれんことを切に待つ。菊判布裝一四〇頁、價金一・八〇、東京大村書店發行。

(正)

最近佛敎關係雜誌論文一覽

(大正十年九月ノ一部・十月・十一月)

(A) 佛敎研究

- 大乘起信論と華嚴經 村上 專精 哲學雜誌十一
- 般若經と涅槃經の交渉 安藤 州一 眞宗の世界十一
- 俱舍論の考察 加藤 秀旭 無礙光九、十、十一
- 伽他佛説論を疑ふ 渡邊 棗雄 哲學雜誌十一
- 敎行信證後序に對する一考察 椋原 眞隆 佛國十
- 大經に統べられたる法華經と華嚴經 同 六條學報十一
- 安心決定鈔と蓮如上人 横井 信空 同
- 敎行信證に現はれたる論、論註 小山 法城 同
- 敎行 書に現れたる四帖疏(下) 川尻 宏濟 同 十

安心決定鈔と蓮如上人(上)

横井 信空 同

證空の著書に就て

上杉 慧岳 佛教研究二ノ四

明義進行集とその著者

橋川 正 同

親鸞聖人の太子和讃に就て

目下 無倫 同

廣本選擇集延書

今岡 松庵 無礙光九

選擇集の古版本に就て

藤堂 祐範 圖書雜誌四六號

聖徳太子三經疏の研究

塚崎 榮智 人生と表現十、十一

維摩經上宮疏研究

北峯 順修 生命と威力十

傳教大師全集索引

菊岡 義衷 叡山宗教十

覺鏝上人に顯はれたる往生要集

高神 覺昇 同

往生要集讀後感

木村 卯之 人生と表現十一

一宗の大意を顯された書としての歎異鈔

西谷 順誓 眞宗宣傳十、十一

歎異鈔の編者考

梅原 眞隆 親鸞聖人研究八輯

慈信房義絶の御消息

同 同 七輯、八輯

善鸞義絶消息論

井上 右近 人生と表現十一

天台法華宗學生式問答に就て

末廣 照啓 山家學報第十六號

藥師如來講式私見

梅田 圓妙 同

傳教大師願文の讃仰

仁科 賢道 同

(B) 敎理研究

般若の研究 椎尾 辨匡 新布敎十

日蓮の本尊に就ての考察

里見 岸雄 法華十

罪に關する日蓮の懷抱

姉崎 正治 同 十一

大正に活現せる親鸞信仰と日蓮信仰

大觀十一

三家唯識の研究

近角、梅原、紀平、白井、山中

大乘論

山川、清水、柴田、里見

業及十二因縁の考察

深浦 正文 六條學報十一

五戒と五常とに對する調和論の研究

村上 專精 哲學雜誌十

玉泉の宗風

宮武 義象 六大新報九四一

行信往生淨土と廻向原理

久保田量達 無礙光九

信巻を中心とせる敎行信證

大野 法道 同 十一

成佛思想の一考察

山田 契誠 佛國十

輪廻轉生説十一

源 哲勝 同

無我觀の研究

高神 覺昇 密宗學報十一

俗諦論

問野 闡門 法藏十一

親鸞聖人の立敎開宗に就て

安藤 州一 合掌十

立敎開宗

多田 鼎 敎化九

六種供養

諸 家 同 十一(紀念號)

土砂加持の功德

村上 專精 宗報九、十一

卍字源流攷

松坂 旭信 密宗學報九、十

(C) 史的研究

上村 敦仁 智嶺新報十一

印度佛敎發達に關する考察

那波 利貞 史林六ノ四

釋尊時代印度の思想及び信仰

字井 伯壽 東亞之光十一

赤沼 智誓 佛教研究二ノ四

同 佛國十

釋尊教團の人々

親鸞聖人在教時代
西行と芭蕉

同 鷲尾 敦導 六條學報二三八
尾山篤二郎 新文學十一

手島 文倉 宗教研究十四

哲人的偉人としての西行と芭蕉
芭蕉の終焉と浪化上人
浪化上人に就ての断片

何育王傳

田中 桃堂 法華十、十一

高木 武 東亞之光十一

迦颯色迦王の年代に就て

西 文正 六條學報十

大峰山と役小角
聲明史概観

同 釋臣 炎涼 同

六處寶塔の眞意義附大塔宮考

清田 寂榮 山家學報第十六號

高野山衆僧の階級衣鉢考
慶長時代の三學問僧と高野活字と僧三要との關係

同 大山 公淳 密宗學報九

淨華院香衣參内繪旨宣下の顛末に就て

高瀬 承殿 無礙光九

中田 法壽 高野山時報二四六

法然上人傳に就て上野氏へ與ふ

今岡 松庵 同 十

水原 堯榮 圖書館雜誌四十六號

沙彌生活(沙彌列傳)

橋川 正 合掌十一

經濟史上より觀たる近江(經濟界に於ける山門の勢力)

仲尾次政隆と其法難

田代 哲英 中外日報六六五〇

三浦 周行 歴史地理十

佛光寺派寺院所傳の親鸞聖人門侶史料

日下 無倫 佛教研究二ノ四

愚管抄に就て

同 橋本 凝胤 無礙光十一

日蓮上人と其の門下(五六)

小林 一郎 法華十、十一

再び銅鐸に就て(上)

同 梅原 末治 藝文十一

聖德太子と日蓮上人

境野 哲 同 十

牛臥山の經塚

同 山中 笑 考古學雜誌十二ノ三

聖德皇と善信

梅原 眞隆 親鸞聖人研究七輯

東都扇額略目

同 汲古生 同

唯圓房のこまごも

同 同

印刷文化展覽會に於ける歴史的列品

同 高橋 健自 同

親鸞と道元

岡田 播陽 合掌十

山城國西山瓦經

同 和田 千吉 同

聖德太子の十七條憲法論

植木直一郎 國學院雜誌十一

國史に現はれた問題の女性(光明皇后願西尼等)

同 諸 家 中央史壇十

眞盛上人の御傳に就て

十河 泰隆 眞盛上人第一號

眞盛上人と四十八日夜別時念佛

諸 家 中央史壇十

眞盛上人と四十八日夜別時念佛

同 同

諸 家 中央史壇十

眞盛上人と四十八日夜別時念佛

同 同

諸 家 中央史壇十

眞盛上人と四十八日夜別時念佛

同 同

諸 家 中央史壇十

眞盛上人と四十八日夜別時念佛

同 同

諸 家 中央史壇十

眞盛上人と四十八日夜別時念佛

同 同

諸 家 中央史壇十

眞盛上人と四十八日夜別時念佛

同 同

諸 家 中央史壇十

佐渡の順徳院 藤澤 衛彦 同十一

道鏡皇胤論 喜田 貞吉 史林六ノ四

三途臺長福壽寺 南臈 逸人 歴史地理十一

奈良朝の寫經と佛教の社會的影響 津田 敬武 宗教研究十四

日本庭園の系統に就て(佛教の影響) 外山 英策 國華三七七

假名乞兒の思想に就て 中井 自朗 密宗學報九、十

弘法大師入定說に就て 加藤 精神 六大新報三六—三九

(D) 佛教藝術の研究

醍醐寺藏釋迦曼荼羅圖解 獅 埴 國華三七七

森村氏藏羅漢圖解 芳 外 同

集古館藏華嚴五十五所圖解 芳 外 同 三七六

中宮寺如意輪觀音像の様式に就て 濱田 耕作 同 三七六—三七七

東大寺戒壇院四天王像に就て 北峯 順修 合掌十一

アジヤンター石窟寺の彫刻的文様に就て 澤村專太郎 國華三七七

西印度ゴータミーブトラ窟に就て(中) 同 史林六ノ四

ペリオ氏出版、敦煌壁畫寫真集 橋川 正 人生と表現十

新指定國寶略説 歴史地理十一

最近佛教研究關係雜誌論文一覽

飛鳥奈良朝に於ける伽藍のプランに就て 橋本 凝胤 無礙光九

(E) 雜 東洋學の要望 常盤 大定 東洋哲學九

清代の學風と其暗示 忽滑谷快天 第一義十一

聖十一面觀世音菩薩 服部 如實 密宗學報十、十一

大黒天及夷神再考 長沼 賢海 史學雜誌十

弘法大師の自然觀 小川 本元 六大新報九三四

内觀禪思の日蓮 守屋 貫教 法華十一

凡夫の日蓮 田邊 善知 同 十

禪戒新話 保坂 玉泉 第一義二五ノ二十

社會學上より見たる極樂淨土 台麗 隱士 叡山宗教十

佛典上に顯れたる佛教藝術 富永 紫天 高野山時報二四〇

印度の醫方及び藥物 泉 芳環 佛教研究二ノ四

伽羅の話 坪井九馬三 東洋學藝雜誌十

高野山と交通 中村 同 六大新報九三六

高野山嶺に於て 魚澄 同

高野山と勤王 小酒井 同

高野山に就て 魚澄總五郎 六條學報十一

夢と高僧 紫 樂 生 叡山宗教十

現代思潮と生活に對する宗教の新局面 矢吹 慶輝 六大新報三三—三三三

佛教的社會運動の原理及實際 高野山時報二四〇—二四三

一四五 一四五

釋尊教團の人々 同 佛國十
佛教史上より見たる日鮮の關係 同 佛國十

何育王傳 田中 桃堂 法華十、十一
手島 文倉 宗教研究十四

迦膩色迦王の年代に就て 酉 文正 六條學報十
六處寶塔の眞意義附大塔宮考

淨華院香衣參内綸旨宣下の顛末に就て 清田 寂榮 山家學報第十六號
高瀬 承嚴 無礙光九

法然上人傳に就て上野氏へ與ふ 今岡 松庵 同 十

沙彌生活(沙彌列傳) 橋川 正 合掌十一
仲尾次政隆と其法難 田代 哲英 中外日報六六五〇

佛光寺派寺院傳の親鸞聖人門侶史料 日下 無倫 佛教研究二ノ四

日蓮上人と其の門下(五六) 小林 一郎 法華十、十一
聖德太子と日蓮上人 境野 哲 同 十

聖德皇と善信 梅原 眞隆 親鸞聖人研究七輯
唯圓房のことゝも 同 同

親鸞と道元 岡田 播陽 合掌十

聖德太子の十七條憲法論 植木直一郎 國學院雜誌十一
眞盛上人の御傳に就て 十河 泰隆 眞盛上人第一號
眞盛上人と四十八日夜別時念佛

親鸞聖人在叡時代 同 鷲尾 敦導 六條學報二三八
西行と芭蕉 尾山篤二郎 新文學十一

哲人的偉人としての西行と芭蕉 高木 武 東亞之光十一
芭蕉の終焉と浪化上人 桂井 未翁 懸葵十

浪化上人に就ての斷片 釋臣 炎涼 同
大峰山と役小角 同 同 十一

聲明史概観 大山 公淳 密宗學報九
高野山衆僧の階級衣鉢考 中田 法壽 高野山時報二四六

慶長時代の三學問僧と高野活字と僧三要との關係 水原 堯榮 圖書館雜誌四十六號

經濟史上より觀たる近江(經濟界に於ける山門の勢力) 三浦 周行 歴史地理十

法隆寺献納御物銘文に就て 橋本 凝胤 無礙光十一
愚管抄に就て 今岡 達音 同

再び銅鐸に就て(上) 梅原 末治 藝文十一
牛臥山の経塚 山中 笑 考古學雜誌十二ノ三

東都扁額略目 汲古生 同
印刷文化展覽會に於ける歴史的列品 高橋 健自 同

山城國西山瓦經 和田 千吉 同

國史に現はれた問題の女性(光明皇后願西尼等)

佐渡の順徳院

藤澤 衛彦 同十一

道鏡皇胤論

喜田 貞吉 史林六ノ四

三途臺長福壽寺

南聰 逸人 歴史地理十一

奈良朝の寫經と佛教の社會的影響

津田 敬武 宗教研究十四

日本庭園の系統に就て(佛教の影響)

外山 英策 國華三七七

假名乞兒の思想に就て

中井 自朗 密宗學報九、十

弘法大師入定說に就て

加藤 精神 六大新報三、八、九、一〇

(D) 佛教藝術の研究

醍醐寺藏釋迦曼荼羅圖解

獅崎 庵 國華三七七

森村氏藏漢圖解

芳 外 同

集古館藏華嚴五十五所圖解

芳 外 同 三七六

中宮寺如意輪觀音像の様式に就て

濱田 耕作 同 三七六—三七七

東大寺戒壇院四天王像に就て

北峯 順修 合掌十一

アジャンター石窟寺の彫刻的文様に就て

澤村專太郎 國華三七七

西印度ゴータミーブトラ窟に就て(中)

同 史林六ノ四

ペリオ氏出版、敦煌壁畫寫真集

橋川 正 人生と表現十

飛鳥奈良朝に於ける伽藍のプランに就て

橋本 凝胤 無礙光九

(E) 雜

東洋學の要望

常盤 大定 東洋哲學九

清代の學風と其暗示

忽滑谷快天 第一義十一

聖十一面觀世音菩薩

服部 如實 密宗學報十、十一

大黒天及夷神再考

長沼 賢海 史學雜誌十

弘法大師の自然觀

小川 本元 六大新報九三四

内觀禪思の日蓮

守屋 貫教 法華十一

凡夫の日蓮

田邊 善知 同 十

禪戒新話

保坂 玉泉 第一義二五ノ二十

社會學上より見たる極樂淨土

台麓 隱士 叡山宗教十

佛典上に顯れたる佛教醫術

富永 紫天 高野山時報二四〇

印度の醫方及び藥物

泉 芳環 佛教研究二ノ四

伽羅の話

坪井九馬三 東洋學藝雜誌十

高野山と交通

高野山に於て

高野山と勤王

高野山に就て

夢と高僧

現代思潮と生活に對する宗教の新方面

魚澄 繪五郎 六條學報十一

佛教的社會運動の原理及實際

紫 樂 生 叡山宗教十

矢吹 慶輝 六大新報三、一、九、三

高野山時報二〇—二四三

新指定國寶略説

橋川 正 歴史地理十一

最近佛教研究關係雜誌論文一覽

一四五

一四五

江田 俊雄 第一義十一

宗敎家と社會問題との關係 駒井 義視 同

市村町名卷職と僧侶 村上 泥牛 智嶺新報十

佛敎寺院の經濟組織を論ず 禿氏 祐祥 六條學報二三八

寺院とは何ぞ 高田 儀光 第一義十一

寺院經濟の原理(僧中と私齋)友松 圓諦 中外日報十二月七日

佛敎各派寺院の地方的分布 二階堂保則 日本及日本人
六大新報九三七

聖女崇拜の心理 福原 武 同 十一

穢多の氏神 森 貞二郎 民族と歴史十
十一

乞食とお薦といふ由來(薦僧)喜田 貞吉 同 十一

關東に於ける雜信仰 寺西 惠然 教化九

(F) 文學的作品

道元禪師(脚本) 黒山 鬼窟 中央佛敎十

人間親鸞 石丸 梧平 大觀十一

良 忠 江川 月泉 無礙光十

俊 寛 菊地 寛 改造十

雪山童子の求道 松山 亮 佛國十

The Eastern Buddhist.

What is the True Sect of the Pure Land? G. Sasaki.

The Buddha as Preacher. C. Akanuma.

The Revelation of a New Truth in Zen Buddhism.
D. T. Suzuki.

The New Buddhist Movement in Germany B. Suzuki.

What is Buddhism Phikku Sliacara

Nibhana Buddha as a Reformer A. T. Edmunds

Buddhism in the West T. E. Eliam

The last Birth of the Bodhisatt

Magandiya

The Practice of Buddhism

The Pitaka. Literature and the Higher Criticism

Edward Greenly:

Paticca Samppada C. A. Pereira

Tathayata Dhamma K. Tin. ratona